古英語 aweccan とラテン語 concitare について

石　原　　覚

I

以下は、イスラエルの民が異教崇拝により神の怒りを招いたことを述べる、古ラテン語訳（Vetus Latina）の申命記の一節である。[1] この箇所には「刺激する」の意味を持つ動詞 concitare が用いられている。

(1) Exacerbauerunt me in alienis, in abominationibus suis *concitauerunt* me (VET. LAT. deut. 32, 16 (Lucif. non parc. 23))[2]
（彼らは他の者たち［神々］により私を憤らせ、彼らの忌まわしいことにより私を刺激した。）

申命記32:1–43は、モーセの賛歌（Canticum Moysis）と呼ばれ、土曜日（sabbatum）に歌われた。(1) の concitare は、詩篇に付属する賛歌への古英語の各種行間注解（interlinear glosses）のうち PsCaD[3] において、次の (2) に見られるごとく、同じく「刺激する」を意味する動詞 aweccan へと訳されている。[4]

(2) hy gremedon on fremedum on ascynungum heora hy *awehtun* (PsCaD 7(6).16)

(1) において concitare は先行する exacerbare（怒らせる）と並行しており、後者は (2) において gremman（怒らせる）へと訳されている。[5] ここで注意すべきは、concitare と aweccan が、共に悪い意味においてのみならず良い意味においても人を刺激することについて用いられる語であるため、(1)(2) ではこれらの語と、並行関係にある――共に「怒らせる」を意味する――exacerbare, gremman との間に、それぞれ不均衡が生じているという事実である。

(1) の exacerbare と concitare は、ギリシャ語原文、すなわち七十人訳聖書（LXX）において均衡を保って用いられた二つの「怒らせる」を意味する動詞に由来している。LXX には、異教崇拝とかかわる何らかの事物を手段として神を怒らせるという表現が繰り返し現れる。その際用いられ

る「怒らせる」の意味の動詞を、「刺激する」の意味のラテン語が訳している例が、(1) の concitare 以外にも、少数ながら見出される。それらの例に見られるラテン語動詞は、concitare と同様、悪い意味でも良い意味でも人を刺激することに用いられる語である。

本稿では、(1) の concitare はそれらと同種の例であって、ギリシャ語原文における並行体を無視して用いられたこの concitare が aweccan に忠実に訳されることにより、ラテン語原文における並行体の乱れが、古英語の行間注解に反映されていることを指摘したい。

II

本章では、aweccan と concitare が人ないしは人の心を目的語として用いられるとき、いくつかの用法を共有することを示す。

まず aweccan と concitare は、次の (3)(4) におけるごとく、人を何らかの感情へと導くことについて用いられる。

(3) In eallum þæm he geornlice gemde, þæt he men atuge from synna lufan & mandæda, & to lufan & to geornfulnesse *awehte* godra dæda. (Bede 4 25.346.15)[6)]
（これらすべて［の歌］において彼は、人々を罪と悪行への愛から引き離し、善行への愛と熱情に駆り立てようと熱心に努めた。）

(4) Atque ita eos ad cupiditatem proelii *concitavit*. (FRONTIN. strat. 1, 11, 19)[7)]
（このようにして彼は彼らを戦闘への熱望に駆り立てた。）

また aweccan と concitare は、次の (5)(6) におけるように、人を何らかの行為へと駆り立てることについて用いられる。

(5) and betæce hi oðron breþer þe him gebysnige lifes unscæðþignysse, and to fremminge *awecce* godes worces. (ChrodR 1 46.19)[8)]
（彼ら［子供たち］に生活の模範を示し、善行の遂行へと促すような、別の修道士を任命すべきである。）

(6) Nam et Pythagoran accepimus *concitatos* ad vim pudicae domui adferendam iuvenes iussa mutare in spondium modos tibicina composuisse, (QVINT. inst 1, 10, 32)[9)]
（ピュータゴラースが、興奮して慎み深い家族に暴力を振るおうとした若者たちを、笛吹き女に拍子を長々格に変えるように命じて、なだ

めたと伝えられるからである。）

さらに aweccan と concitare は、下の (7)(8) に見られるように、人を敵対者に向けて奮起させることについて用いられる。

(7) forþon ic hys costnode and ic gedyde hym þæt eal þæt Iudeisce folc þæt hig wæron ongean hyne myd yrre and myd andan *awehte*, (Nic (A) 20.2.14)[10)]
（私が彼を試み、ユダヤ人すべてが彼に対して、怒り、憤るように仕向けたからである。）

(8) timui enim indignationem et iram illius qua adversum vos *concitatus* delere vos voluit (VVLG. deut. 9, 19)[11)]
（彼がお前たちに対して激し、お前たちを滅ぼそうとした彼の憤りと怒りを、私は恐れたからである。）

その一方で、人を目的語とする aweccan と concitare は、次の (9)(10) におけるように、感情や行為を表す表現を伴わずに現れることがある。

(9) Swa is ðearf ðæt se lareow ærest *awecce* hine selfne, ðæt he wacie on ðære geornfulnesse godra weorca, ðylæs he oðre *awecce* mid his wordum, & himself aslawige godra weorca. (CP 64.461.14)[12)]
（その［雄鶏の］ように教師は、まず自らを奮い立たせて、善行への熱意で目覚めねばならず、自らの言葉で他の者たちを奮い立たせて、自分は善行において怠惰であったりしてはならない。）

(10) Pauci reges, non regna colunt; plures fulgor *concitat* aulae. (SEN. Herc. O. 616)[13)]
（王位ではなく、王を敬慕する者はわずかである。より多くの者たちが惹かれるのは王宮のきらびやかさである。）

なお、人を目的語とする aweccan と concitare は、上の (9) の mid his wordum（彼の言葉により）や下の (11) の his inter se vocibus（これらのお互いの声により）のような、何らかの手段を表す語句を伴うことがある。

(11) his inter se vocibus *concitati* clamare renovato inferunt pedem et primum gradu moverunt hostem, . . . (LIV. 7, 8, 3)[14)]
（このようにお互いに声を掛け合うことで奮い立つと、彼らは新たな叫び声を上げて前進し、まず敵を移動させ、……）

次に aweccan と concitare は、下の (12)(13) におけるように、人の心を何らかの感情へと動かすことについて用いられる。

(12) & swa he þa mynstru heold, þæt he arn þurh cristenra folca gesomnunge

geond ceastre . . . & þurh geleaffulra manna hus, to þon þæt he þara gehyrendra heortan to þære lufan þæs heofonlican eþles *awehte*. (GD 1 (C) 4.33.26)[15)]

（彼は修道院を治め、街のあちこちの……キリスト教徒の集会を、信者たちの家を走り回り、聴いている者たちの心を天の故郷への愛に駆り立てた。）

(13) *Concitaverat* iam animum in iram, cum ei quibus negotium idem dederat superveniunt. (CVRT. 10, 1, 36)[16)]

（彼がすでに［王の］心を怒りへと煽っておいたところへ、［中傷により王を怒らせるという］同じ役目を彼から与えられていた者たちが現れた。）

一方、人の心を目的語とする aweccan と concitare は、次の (14)(15) におけるように、感情を表す表現を伴わずに用いられることがある。

(14) swa swa uðwitena gewuna is þæt hi willað simle hwæthwugu niwes & seldcuþes eowian, þæt hi mægen mid þy *aweccan* þæt mod þara geherendra. (Bo 34.85.24)[17)]

（哲学者たちの習慣――常に何か新しく、珍しいものを示して、それにより聴いている者たちの心を刺激しようとする――がそうであるごとく。）

(15) Id desideratur omnibus eis in locis quos ad fidem orationis faciendam adhiberi dixit Antonius, vel cum explanamus aliquid vel cum conciliamus animos vel cum *concitamus*; (CIC. de orat. 3, 104)[18)]

（それ［敷衍］は、何かを説明するとき、心を捉えるとき、または心を掻き立てるとき――弁論を信用させるために利用されるとアントーニウスが言ったあらゆる機会において、必要とされるものである。）

III

次の (16) は、ローマ皇帝コンスタンティヌス（Constantinus）の母ヘレナ（Elene）の命令により、キリストの十字架を発見したユダ（Iuda）という名のユダヤ人を、悪魔が、「別の王」――背教者ユリアヌス（Iulianus Apostata）[19)]――による迫害を予言して脅すくだりである。ここでは「別の王」を目的語とする aweccan が用いられている。

(16) Gen ic findan can þurh wrohtstafas wiðercyr siððan of ðam wearhtreafum, ic *awecce* wið ðe oðerne cyning, se ehteð þin, ond he forlæteð lare þine ond manþeawum minum folgaþ, ond þec þonne sendeð in þa sweartestan ond þa wyrrestan witebrogan, þæt ðu, sarum forsoht, wiðsæcest fæste þone ahangnan cyning, þam ðu hyrdest ær. (El 924)[20]

（今私は、悪行により、亡者たちの住処から再び戻るすべを見出すことが出来る。私はお前に対して別の王をけしかける（立てる）が、それはお前を迫害し、お前の教えを捨て、我が悪しき習いに従い、お前を最も暗い、最悪の苦しみの恐怖へと送り込むため、お前は、責め苦を受けて、今までお前が従ってきた十字架にかけられた王を、堅く拒むことになる。）

注目に値するのは、*DOE* が *aweccan* 3.b において、(16) の aweccan を、或人を誰か他の人に対して「奮起させる、駆り立てる」(“to rouse, incite”) ことについて用いられた例として挙げていることである。[21]

ここにおけるように、誰に対してけしかけるのかが aweccan が伴う前置詞句により示された例は、*DOE* が (16) と共に挙げる (7) にも見出されるため、*DOE* に従って (16) の aweccan を「奮起させる、駆り立てる」の意味で捉えることは可能である。では、この意味においてのみ、この aweccan は捉えられるべきであろうか。

ここで (16) が由来するラテン語原文である次の (17) を見てみると、問題の aweccan は suscitare（立てる）に対応することがわかる。

(17) Inveniam & ego quid faciam adversum te: *suscitabo* alium Regem, qui derelinquet Crucifixum, & mea exequetur consilia, & immittet in te iniqua tormenta: & tunc cruciatus negabis Crucifixum. (Act.Cyr. 1.11)[22]

（私はお前に対してすべきことを見出すであろう。私は別の王を立てるが、それは十字架にかけられた者を拒み、我が意図を遂行し、お前に非常な苦痛を与えるであろう。そして苦しみを受けるとお前は、十字架にかけられた者を拒むであろう。）

この suscitare は、以下のギリシャ語原文の (18) における ἐγείρειν（立てる）に対応する。

(18) εὕρω κἀγὼ Ἰούδα ἐπίνοιαν, ἥνπερ καὶ ποιήσω κατὰ σοῦ, μηχανησάμενος γὰρ ἐν τῇ ἐμῇ ἐξουσίᾳ καὶ δυνάμει *ἐγερῶ* ἕτερον βασιλέα, ὅστις καταλείψει τὸν ἐσταυρωμένον, καὶ τὰς ἐμὰς βουλάς,

καὶ τὰ θελήματα εὐμενῶς πράξει, καὶ παραδώσω σε δειναῖς καὶ ποικίλαις τιμωρίαις, . . .[23]

（ユダよ、私はお前に対してなす策略を見出すであろう。すなわち私の権力と能力もって企み、別の王を立てるが、それは十字架にかけられた者を捨て、我が企てと意思とを都合よく遂行し、お前をさまざまな恐ろしい苦しみに委ねるであろう。……）

これらの箇所に見られる suscitare と ἐγείρειν は、以下の (19)(20) におけるごとく、共に「（人を）出現させる」の意味を持つ語である。

(19) prophetam de gente tua et de fratribus tuis sicut me *suscitabit* tibi Dominus Deus tuus (VVLG. deut. 18, 15)[24]

（お前の神、主は、お前の民から、お前の同胞から、私のような預言者をお前のために立てるであろう。）

(20) καὶ ἐκέκραξαν οἱ υἱοὶ Ισραηλ πρὸς κύριον· καὶ *ἤγειρεν* κύριος σωτῆρα τῷ Ισραηλ, καὶ ἔσωσεν αὐτούς, (*Jd*. 3.9)[25]

（イスラエルの子らは主に向かって叫んだ。すると主はイスラエルに一人の救助者を立て、彼らを救った。）

よって (17)(18) の suscitare と ἐγείρειν は、「別の王」を登場させることについて用いられていると捉えられる。[26] さらに aweccan も、次の (21) におけるように、「（人を）出現させる」の意味を持つ。

(21) Soþlice ic secge eow þæt god ys swa mihtig þæt he mæg of þysum stanum *aweccean* abrahames bearn; (Mt (WSCp) 3.9)[27]

（まことに私はお前たちに言うが、神には、これらの石からアブラハムの子らを起こせるほどの力がある。）

従って、(16) の aweccan を、*DOE* とは異なり、「出現させる」の意味で捉えることも可能であると言える。[28]

IV

(1) の concitare とその訳語である (2) の aweccan は、(7) における irre や (8) (13) における ira のような、「怒り」を表す語を伴わない。その一方で concitare と aweccan は、下の (22)(23) におけるごとく、共に単独でも、「（悪い意味で人を）刺激する」の意味で用いられることがあり、(1) の concitare と (2) の aweccan はこの意味で用いられていると見られる。

(22) Iniuriis contumeliisque *concitatus*, quod fructu laboris industriaeque meae privatus statum dignitatis non optinebam, . . . (SALL. Catil. 35, 3)[29]
(不当な仕打ちと侮辱により駆り立てられて、というのは我が労苦と精励の果実を奪われ、名誉ある地位を維持できなくなったために、……)

(23) Ða wearþ Simon se dry eallunga *aweht* wiþ ðam apostolum & gelæred þæt he feala yfla sægde, & þæt Petrus bigswica wære; (LS 32 (Peter & Paul) 47)[30]
(すると魔術師シモンは、使徒たちに対して完全にいきり立ち、多くの中傷を言い、またペテロが詐欺師であると言うように仕向けられた。)

ここで重要なのは、concitare と aweccan が――前者は (4)(10) におけるごとく、後者は (3)(5)(9)(12)(14) におけるごとく――共に良い意味で人を刺激することについても用いられる語であるという事実である。従って、(1)(2) においてこれらの語と並行関係にあり「怒らせる」を意味する exacerbare, gremman と、これらの語との間には、それぞれ不均衡が認められる。

ここで (1) の LXX における対応箇所である次の (24) に目を向けてみよう。すると (1) の exacerbare と concitare は、均衡を保って現れた共に「怒らせる」を意味する παροξύνειν と ἐκπικραίνειν にそれぞれ由来することがわかる。

(24) *παρώξυνάν* με ἐπ᾽ ἀλλοτρίοις, ἐν βδελύγμασιν αὐτῶν ἐξεπίκρανάν με· (*De*. 32.16)
(彼らは他の者たちにより私を憤らせ、彼らの忌まわしいことにより私を怒らせた。)

この ἐκπικραίνειν という動詞は、LXX ではここにだけ見られる。[31] ここの "ἐξεπίκρανάν" は、A. Rahlfs 版の脚注で示されている通り、B すなわちバチカン写本（Codex Vaticanus）では "παρεπίκρανάν" つまり同じく「怒らせる」を意味する παραπικραίνειν となっている。なお、LXX における「怒らせる」の意味の παραπικραίνειν の同義語としては παροργίζειν が挙げられる。[32]

この箇所の古ラテン語訳を解釈した

Exacerbauerunt me in alienis. De peccatrice dicitur plebe, quae sibi deos

alienos per doctrinas haereticas fingit. . . .

In abominationibus suis exasperauerunt me. Abominatio dicitur quando Dei sacrificium idolis deputatur. (VEREC. in cant. 2, 16)[33]

（「彼らは他の者たちにより私を憤らせた」。異端の教義により他の神々を自らのために造り上げる、罪深い民について述べられている。……

「彼らの忌まわしいことにより私を激怒させた」。神への犠牲が偶像に割り当てられるとき、それは忌まわしいことと呼ばれる。）

からもわかるように、(24) の「他の者たち」と「彼らの忌まわしいこと」は、ともに異教崇拝に関係している。

ここで注目すべきは、(24) におけるごとく、異教崇拝と関連する何らかの事物を手段として神を怒らせることに用いられた παραπικραίνειν および παροργίζειν の例が、前者は 1 例、後者は12例、LXX に見出されることである。以下 (25)〜(37) にそれらの例を列挙しよう。[34] (25)〜(30) において παροργίζειν ないし παραπικραίνειν は、ἐν (πᾶσιν) τοῖς ἔργοις τῶν χειρῶν ὑμῶν / αὐτῶν / αὐτοῦ（お前たちの（彼らの、彼の）手の（すべての）業により）を伴っている。「手の業」が異教の神々への崇拝を意味するのは (27)〜(30) から看取される。

(25) καὶ συναντήσεται ὑμῖν τὰ κακὰ ἔσχατον τῶν ἡμερῶν, ὅτι ποιήσετε τὸ πονηρὸν ἐναντίον κυρίου *παροργίσαι* αὐτὸν ἐν τοῖς ἔργοις τῶν χειρῶν ὑμῶν. (*De*. 31.29)

（日々の終わりに災いがお前たちに降りかかるであろう。お前たちが主の前で悪をなし、お前たちの手の業により彼を怒らせるからである。）

(26) πᾶσαν τὴν κακίαν, ἣν ἐποίησεν ἐνώπιον κυρίου τοῦ *παροργίσαι* αὐτὸν ἐν τοῖς ἔργοις τῶν χειρῶν αὐτοῦ, . . . (3 *Ki*. 16.7)

（彼［バアシャ］の手の業により彼［主］を怒らせ、……彼が主の前でなしたすべての悪を［主は語った。］）

(27) ἀνθ᾽ ὧν ἐγκατέλιπόν με καὶ ἐθυμίων θεοῖς ἑτέροις, ὅπως *παροργίσωσίν* με ἐν τοῖς ἔργοις τῶν χειρῶν αὐτῶν, (4 *Ki*. 22.17)

（彼らが私を捨て、異なる神々に香を焚き、彼らの手の業により私を怒らせたからである。）

(28) ἀνθ᾽ ὧν ἐγκατέλιπόν με καὶ ἐθυμίασαν θεοῖς ἀλλοτρίοις, ἵνα *παροργίσωσίν* με ἐν πᾶσιν τοῖς ἔργοις τῶν χειρῶν αὐτῶν· (2 *Ch*. 34.25)

（彼らが私を捨て、他の神々に香を焚き、彼らの手のすべての業により私を怒らせたからである。）

(29) μὴ πορεύεσθε ὀπίσω θεῶν ἀλλοτρίων τοῦ δουλεύειν αὐτοῖς καὶ τοῦ προσκυνεῖν αὐτοῖς, ὅπως μὴ *παροργίζητέ* με ἐν τοῖς ἔργοις τῶν χειρῶν ὑμῶν (*Je*. 25.6)

（お前たちは他の神々に従い、それらに仕え、それらに平伏してはならない。お前たちの手の業により私を怒らせ、自分たちに害を招くことのないように。）

(30) *παραπικρᾶναί* με ἐν τοῖς ἔργοις τῶν χειρῶν ὑμῶν θυμιᾶν θεοῖς ἑτέροις ἐν γῇ Αἰγύπτῳ, (*Je*. 51.8)

（［何故お前たちは自分たち自身に対し大きな悪をなすのか。……］エジプトの地で異なる神々に香を焚き、お前たちの手の業により私を怒らせるのか。）

(31)〜(35) において παροργίζειν は、ἐν τοῖς ματαίοις / εἰδώλοις / γλυπτοῖς αυτῶν（彼らの空虚なもの（偶像、彫像）により）と共に用いられている。

(31) αὐτοὶ παρεζήλωσάν με ἐπ᾽ οὐ θεῷ, *παρώργισάν* με ἐν τοῖς εἰδώλοις αὐτῶν· (*De*. 32.21)

（彼らは神ならぬものにより私を妬ませ、彼らの偶像により私を怒らせた。）

(32) καὶ ἐξήμαρτες τὸν λαόν μου τὸν Ισραηλ τοῦ *παροργίσαι* με ἐν τοῖς ματαίοις αὐτῶν, (3 *Ki*. 16.2)

（［お前は］我が民イスラエルに罪を犯させ、彼らの空虚なものにより私を怒らせた［ゆえに］。）

(33) . . . ὡς ἐξήμαρτεν τὸν Ισραηλ τοῦ *παροργίσαι* κύριον τὸν θεὸν Ισραηλ ἐν τοῖς ματαίοις αὐτῶν. (3 *Ki*. 16.13)

（彼がイスラエルに罪を犯させ、彼らの空虚なものによりイスラエルの神、主を怒らせたとき、……）

(34) καὶ ἐν ταῖς ἁμαρτίαις αὐτοῦ, αἷς ἐξήμαρτεν τὸν Ισραηλ τοῦ *παροργίσαι* τὸν κύριον θεὸν Ισραηλ ἐν τοῖς ματαίοις αυτῶν. (3 *Ki*. 16.26)

（イスラエルに罪を犯させた彼［ヤロブアム］の罪において［オムリは歩み］、彼らの空虚なものによりイスラエルの神、主を怒らせた。）

(35) διὰ τί *παρώργισάν* με ἐν τοῖς γλυπτοῖς αὐτῶν καὶ ἐν ματαίοις

ἀλλοτρίοις; (*Je*. 8.19)
（何故彼らは彼らの彫像により、また異邦の空虚なものにより、私を怒らせたのか。）

(36) において παροργίζειν は、ἐν τοῖς βουνοῖς αὐτῶν（彼らの丘により）[35] と共に見出される。

(36) καὶ *παρώργισαν* αὐτὸν ἐν τοῖς βουνοῖς αὐτῶν καὶ ἐν τοῖς γλυπτοῖς αὐτῶν παρεζήλωσαν αὐτόν. (*Ps*. 77(78).58)
（彼らは彼らの丘により彼を怒らせ、彼らの彫像により彼を妬ませた。）

(37) において παροργίζειν は、ἐν τῷ θυμιᾶν αὐτοὺς τῇ Βααλ（バアルに香を焚くことにより）を伴っている。

(37) ἀντὶ τῆς κακίας οἴκου Ισραηλ καὶ οἴου Ιυδα, ὅτι ἐποίησαν ἑαυτοῖς τοῦ *παροργίσαι* με ἐν τῷ θυμιᾶν αὐτοὺς τῇ Βααλ. (*Je*. 11.17)
（イスラエルの家とユダの家の悪――彼らがバアルに香を焚いて私を怒らせ、何であれ彼らが彼ら自身に対してなしたこと――の故に［お前を植えた主はお前に対し災いを宣言した。］）

(25)～(37) のうち (25)(27)(31)(32)(36) の「怒らせる」を意味する παροργίζειν は、以下の (38)～(42) において、「怒らせる」を意味する in ira / iram concitare または exacerbare へと忠実に訳されている。

(38) . . . quia facietis malignum in conspectu Domini Dei uestri *in ira concitare* eum in operibus manum uestrarum (VET. LAT. deut. 31, 29 (Lugd.))[36]
（……お前たちが、お前たちの神、主の前で悪をなし、お前たちの手の業により神を怒らせるからである。）

(39) . . . et *exacerbauerunt* me in operibus manuum suarum. (VET. LAT. IV reg. 22, 17 (Lucif. non parc. 7))[37]
（……彼らの手の業により私を怒らせた［からである］。）

(40) . . . *in ira concitaverunt* me in simulacris suis (VET. LAT. deut. 32, 21 (cod. 250))[38]
（……彼らの偶像により私を怒らせた。）

(41) quia *exacerbaverunt* me in vanis eorum, (VET. LAT. III reg. 16, 2 (Gild. Brit. 40 chron. III))[39]
（［イスラエルが］彼らの空虚なものにより私を怒らせたゆえに、）

(42) et *in ira concitaverunt* eum in collibus suis . . . (VVLG. psalm. 77, 58)
（彼らは彼らの丘により彼を怒らせ、……）

また以下の (1) とは別の古ラテン語訳の対応箇所においては、παροξύνειν は (1) におけると同じ exacerbare に訳されているが、ἐκπικραίνειν（または παραπικραίνειν）は、(1) におけると異なり、適切に in iram concitare へと訳されている。

(43) Et *exacerbaverunt* me in diis alienis, in abominationibus suis *in iram concitaverunt* me. (VET. LAT. deut. 32, 16 (cod. 419))[40)]
（彼らは他の神々により私を憤らせ、彼らの忌まわしいことにより私を怒らせた。）

V

前章で見た通り、LXX において神を憤らせる手段としての異教崇拝についての句を伴う「怒らせる」の意味の動詞を、適切に「怒らせる」の意味のラテン語が訳している例が見出される。他方、LXX で同じく異教崇拝に関する句を伴う「怒らせる」の意味の動詞を、「刺激する」の意味のラテン語が訳している例も、(1) の concitare 以外に、少数ではあるが存在する。以下の (44)(45) では、(24) の ἐκπικραίνειν（または παραπικραίνειν）が provocare（刺激する）により、(29) の παροργίζειν が incitare（刺激する）により表されている。

(44) Verba itaque nostis, quibus Deum debemus inpensius conlaudare. Si coeperimus turpiloquiis uitiare, in abominationibus nostris Dominum *prouocamus*. (VEREC. in cant. 2, 16)[41)]
（我らが惜しみなく神を賛えるにふさわしい言葉を、あなたたちは知っている。もし厭わしい言葉により害することを始めるなら、我らは我らの忌まわしいことにより主を刺激するのである。）

(45) . . . et ne *incitetis* me in operibus manuum uestrarum ad disperdendos uos. (VET. LAT. Ier. 25, 6 (Cypr. Demetr. 6))[42)]
（……お前たちの手の業により私を刺激し、お前たちを滅ぼすことのないように。）

provocare と incitare は、次の (46)(47) におけるように、共に「怒り」を表す表現を伴わず、単独でも「（悪い意味で人を）刺激する」の意味を表すことがあり、(44) の provocare と (45) の incitare は、この意味で用いられていると言える。

(46) Nulla iniuria *provocatum* Antistium gravissimas in principem contumelias dixisse; (TAC. ann. 14, 49)[43)]
（アンティスティウスは、不当な扱いに挑発されたわけでもないのに、君主に対して極めて激しい侮辱を口にした。）

(47) Quorum timor cum fremitu et concursu significaretur, milites nostri pristini diei perfidia *incitati* in castra irruperunt. (CAES. Gall. 4, 14, 3)[44)]
（彼らの恐怖が、どよめきと混乱により明らかになると、前日の不誠実に激していた我らが兵たちは、陣営に攻め入った。）

ここで見過ごせないのは、これらの動詞が、以下の (48)(49) におけるごとく、共に良い意味で人を刺激することについても用いられるという事実である。

(48) . . . alium a spectaculo poenae epulis statim, adhibuit atque omni comitate ad hilaritatem et iocos *provocavit*. (SVET. Cal. 27, 4)[45)]
（……別の者には、［カリグラは］自分の息子の処刑を見せてからすぐに宴席に呼び寄せ、大いに愛想良くして、陽気になるように、またおどけるように促した。）

(49) Ipse Vespasianus adire, hortari, bonos laude, segnis exemplo *incitare* saepius quam coercere, . . . (TAC. hist. 2, 82, 1)[46)]
（ウェスパシアーヌス自身が赴き、励まし、良い者［労働者］たちは称賛により、鈍い者たちは模範により、懲らしめるよりはしばしば促し、……）

前章で示したように、concitare も悪い意味と良い意味の両方において人を刺激することについて用いられる語である。従って (1) の concitare は、(44) の provocare および (45) の incitare と同種の例であると認められる。

PsCaD 7(6).16 の aweccan（刺激する）と gremman（怒らせる）、これらが由来するラテン語 concitare（刺激する）と exacerbare（怒らせる）、さらにこれらが由来する共に「怒らせる」を意味するギリシャ語 παροξύνειν と ἐκπικραίνειν（または παραπικραίνειν）は、それぞれ並行関係にあるが、aweccan と concitare が共に悪い意味におけると同様良い意味においても人を刺激することに用いられる動詞であるが故に、PsCaD 7(6).16 およびそのラテン語原文では、これらの語と gremman, exacerbare との間に、それぞれ不均衡が看取される。

LXX に繰り返し現れる、異教崇拝と関連する何らかの事物を手段とし

て神を怒らせるという表現に用いられる「怒らせる」の意味の動詞を、「刺激する」の意味のラテン語が訳している例が、問題箇所の concitare を除いて、2 例見出される。それらに見られる provocare と incitare は、共に悪い意味においてのみならず良い意味においても人を刺激することに用いられる動詞である。よって問題の concitare はそれらと同種の例であり、ギリシャ語原文における並行体に配慮せず用いられたこの concitare が aweccan に直訳されることで、ラテン語原文における並行体への無配慮が、古英語の行間注解に継承されていると結論できる。

注

1）古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、*DOE*（A. Cameron et al., *Dictionary of Old English: A to G on CD-ROM* (Toronto, 2008)) に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または *TLL*（*Thesaurus Linguae Latinae* (Leipzig, 1900–)) に従う。なお、頭に括弧付の番号を振った、古英語、ラテン語およびギリシャ語の引用文中のイタリック部分は、すべて筆者によるものである。

2）G. F. Diercks, “De non parcendo in deum delinquentibus,” *Luciferi Calaritani Opera Quae Supersunt*, CCSL 8 (Turnholti, 1978), p. 241.

3）F. Roeder, *Der altenglische Regius-Psalter*, Studien zur englischen Philologie 18 (Halle, 1904; Nachdr. Tübingen, 1973).

4）(1) と同一の文は PsCaD のラテン文以外に PsCaA (S. M. Kuhn, *The Vespasian Psalter* (Ann Arbor, 1965)), PsCaC (K. Wildhagen, *Der Cambridger Psalter*, Bib. ags. Prosa 7 (Hamburg, 1910; Nachdr. Darmstadt, 1964)), PsCaE (F. Harsley, *Eadwine's Canterbury Psalter*, EETS 92 (London, 1889)) のラテン文にも見られ、これら 3 つの行間注解においても問題の concitare は aweccan に訳されている。ただし PsCaE において in abominationibus（忌まわしいことにより）は「支配者たちから」（“fræm weældendum”）と誤訳されている。

5）(1) の exacerbare は、PsCaA と PsCaC ではそれぞれ onscunian, ascunian（嫌悪する）へ、PsCaE では began（崇拝する）へ、誤訳されている。

6）T. Miller, *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, pt. 1, 2, EETS 96 (London, 1891). (3) の aweccan は BEDA. Hist.eccl. 4.24, 418 (B. Colgrave and R. A. B. Mynors, *Bede's Ecclesiastical History of the English People* (Oxford, 1969)) の “. . . ad dilectionem uero et sollertiam bonae actionis excitare curabat”（……まことに善行への愛と工夫に駆り立てようと努めた）における excitare（刺激する）に由来する。(3) および後出の (5)(12)(14)

は *DOE*, s.v. *aweccan* 3.a の「奮起させる、刺激する、動かす、駆り立てる（或人または心を（対格）、感情、熱情または行動へ（to, in または on と与格）、……）」（“to rouse, excite, move, provoke, inspire (someone / one’s mind *acc*. to emotion / zeal / action *to / in / on* and *dat*.); . . .”）に（(14) 以外はラテン語原文と共に）挙げられている例である。

7）C. E. Bennett, *Frontinus: The Stratagems,* . . . LCL (Loeb Classical Library) 174 (1925), p. 78. (4) は *TLL*, s.v. *concito* IIA1 の「或人を燃え上がらせる、興奮させる、かき乱す、刺激する、恐れさせる、など」(“aliquem inflammare, commovere, perturbare, sollicitare, terrere, sim.”）の f において、何へと刺激するのかを示す前置詞句（ad aliquid）を伴う例として挙げられている（vol. 4, p. 66, 11–12）。

8）B. Langefeld, *The Old English Version of the Enlarged Rule of Chrodegang*, Münchener Universitätsschriften, Texte und Untersuchungen zur Englischen Philologie 26 (Frankfurt am Main, 2003), p. 261. (5) の aweccan は CHRODEGANG.METT. Reg.can. 46.18（Langefeld, p. 260）の “. . . qui eos et innocentis uite exemplis reformet, et ad opus bonum peragendum excitet”（彼らを生活の無垢な規範により改造し、善行の遂行へと促すような、……）における excitare に由来する。

9）D. A. Russell, *Quintilian: The Orator’s Education, Books 1–2*, LCL 124 (2001), p. 228. (6) は、(4) 同様 *TLL*, s.v. *concito* IIA1f に挙げられている例である（p. 66, 9–10）。

10）J. E. Cross et al., *Two Old English Apocrypha and Their Manuscript Source*, Cambridge Studies in Anglo-Saxon England 19 (Cambridge, 1996), p. 211. (7) の aweccan は Evang.Nic. 20.2（Cross et al., p. 210）の “. . . et populum meum antiquum Iudaicum excitaui zelo et ira aduersus eum”（……我が古き民であるユダヤ人を、彼に対して怒らせ、憤らせたからである）における excitare に由来する。(7) は *DOE*, s.v. *aweccan* 3.b の「奮起させる、駆り立てる（或人を（対格）、誰か他の人に対して（ongean または wiþ と与格））」（“to rouse, incite (a person *acc*., against someone else *ongean / wiþ* and *dat*.)”）にラテン語原文と共に挙げられている例である。

11）R. Weber et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, ed. quinta (Stuttgart, 2007). (8) は A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens*, rev. par H. Chirat (Turnhout, 1954), s.v. *concito* の「…に対して激させる」（“exciter contre”）の語義の下に、誰に対して刺激するのかを示す前置詞句（aduersus aliquem）を伴う例として挙げられている。

12）H. Sweet, *King Alfred’s West-Saxon Version of Gregory’s Pastoral Care*, pt. 2, EETS 50 (London, 1871). (9) の 2 つの aweccan のうち、前者は GREG.MAG. Reg.past. 3.40.9 (B. Judic et al., *Grégoire le Grand: Règle Pastorale*, t. 2, SChr 382

(Paris, 1992), p. 532）の “Quia nimirum necesse est ut hi qui uerba sanctae praedicationis mouent, prius studio bonae actionis euigilent, ne in semetipsis torpentes opere, alios excitent uoce”（というのは、当然、神聖な説教の言葉を発する者たちは、まず善行への熱意により目覚めねばならず、自らは行動において怠惰でありながら、他の者たちを言葉で奮い立たせてはならない）の evigilare（目覚める）に、後者は同じ箇所の excitare に由来する。前者の aweccan は *DOE*, s.v. *aweccan* 3.c の「（再帰的）奮起する」（“reflexive: to rouse, stir oneself”）に例示されている。

13）J. G. Fitch, *Seneca: Oedipus, . . . Hercules on Oeta, . . .* LCL 78 (2004), p. 386. (10) は *OLD* (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary*, 2nd ed., 2 vols. (Oxford, 2012)), s.v. *concito* 4の「奮起させる、勧める、駆り立てる」（“To rouse to exertion, exhort, impel”）に挙げられている例である。

14）B. O. Foster, *Livy: History of Rome, Books V–VII*, LCL 172 (1924), p. 380. (11) は *TLL*, s.v. *concito* IIA1cα において、何により刺激するのかを表す奪格（aliqua re）を伴い、人を目的語とする例として挙げられている（p. 65, 49）。

15）H. Hecht, *Bischof Wærferths von Worcester Übersetzung der Dialoge Gregors des Grossen*, Bib. ags. Prosa 5, 1. Abt. (Leipzig, 1900; Nachdr. Darmstadt, 1965). (12) の aweccan は GREG.MAG. Dial. 1.4.10 (A. de Vogüé, *Grégoire le Grand: Dialogues*, t. 2, SChr 260 (Paris, 1979), p. 46) の “. . . et corda audientium ad amorem patriae caelestis excitaret”（……聴いている者たちの心を天の故郷への愛に駆り立てた）における excitare に由来する。

16）J. C. Rolfe, *Quintus Curtius: History of Alexander, Books VI–X*, LCL 369 (1946), p. 478. (13) は *TLL*, s.v. *concito* IIA2の「心などを動かす」（“animum, sim. movere”）に挙げられている例である（p. 66, 38–39）。

17）W. J. Sedgefield, *King Alfred's Old English Version of Boethius De Consolatione Philosophiae* (Oxford, 1899).

18）H. Rackham, *Cicero: De Oratore, Book III, . . .* LCL 349 (1942), pp. 82–84. (15) は、*TLL*, s.v. *concito* IIA2に挙げられている例である（p. 66, 20–21）。

19）P. O. E. Gradon, *Cynewulf's 'Elene,'* rev. ed. (Exeter, 1977), p. 60n 参照。

20）G. P. Krapp, *The Vercelli Book*, ASPR 2 (New York, 1932), pp. 91–92.

21）S. A. J. Bradley（*Anglo-Saxon Poetry* (London, 1982), p. 188）も、問題の aweccan を「奮起させる」（“stir up”）と訳している。

22）G. Henschenius et D. Papebrochius, *Acta Sanctorum Maii*, tom. 1, p. 447D.

23）A. Holder, *Inventio Sanctae Crucis* (Lipsiae, 1889), pp. 36–37. (18) で ἐγείρειν に先立って見出される ποιεῖν κατά（…に対してなす）という表現は、(17) において facere adversum（…に対してなす）と表されているが、問題の (16) の aweccan が伴う wið（…に対して）は、この (17) の adversum に緩く由来

していると考えられる。

24）(19) は Blaise, s.v. *suscito* 4の「生ぜしめる、出現させる」（“susciter, faire venir, faire paraître”）に引用されている例である。

25）A. Rahlfs, *Septuaginta*, ed. altera (Stuttgart, 2006). ギリシャ語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones, with a revised supplement (Oxford, 1996) による。(20) は T. Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint* (Louvain, 2009), s.v. ἐγείρω 4の「生み出す」（“*to bring into existence*”）において、「何らかの役割を帯びた人」（“hum. invested with a certain function”）を目的語とする例として挙げられている。なお、(20) の ἐγείρειν と (19) の suscitare が共にヘブライ語原典で対応する קום の Hiphil も、BDB (F. Brown, S. R. Driver, and C. A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* (Oxford)), s.v. קום Hiph. 3にあるように「立てる＝出現させる」（“*raise up*＝bring on the scene”）の意味で用いられる。

26）M. J. B. Allen and D. G. Calder（*Sources and Analogues of Old English Poetry* (Cambridge, 1976), p. 66）も、問題の suscitare を「立てる」（“raise up”）と訳している。

27）W. W. Skeat, *The Gospel according to Saint Matthew and according to Saint Mark* (Cambridge, 1887, 1871; Nachdr. Darmstadt, 1970). (21) は *DOE*, s.v. *aweccan* 4.h の「（再び）起こす、特にここでは『（跡継ぎを）作る、生む』の意味の suscitare または resuscitare を訳して……」（“to raise up (again); rendering *suscitare / resuscitare*, here specifically ‘to engender, produce (an heir)’ . . .”）に挙げられている例である。なお、この aweccan は、(16) の aweccan と同じく、ἐγείρειν に由来する suscitare を訳すものである。

28）J. Bosworth and T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford, 1898), s.v. *aweccan* II の「刺激する、奮起させる、生じさせる、立てる、子らを起こす」（“*to excite*, *rouse*, *stir up*, *call forth*, *raise up*, *raise up children*”）でも、問題の aweccan は「立てる」（“raise up”）と訳されている。

29）J. C. Rolfe, *Sallust*, LCL 116 (1931), p. 60. (22) は、(11) 同様 *TLL*, s.v. *concito* IIA1cα に（p. 65, 48）、さらに K. E. Georges, *Ausführliches lateinisch-deutsches Handwörterbuch*, 11 Aufl., 2 Bde. (Hannover, 1962), s.v. *concito* I.2.c の「一般に、或人を怒り・憤りへと刺激する、かき立てる、激昂させる、怒り・憤りへと燃え上がらせる」（“gew. zum Zorn, zur Wut jmd. aufregen, aufbringen, aufreizen, aufstacheln, in Harnisch bringen, zum Zorn, zur Wut entflammen”）に挙げられている例である。

30）R. Morris, *The Blickling Homilies*, EETS 58, 63, 73 (London, 1874–80; repr. as 1 vol. 1967), p. 173. (23) の aweccan は PASS. Petr. Paul. long. 11 (R. A. Lipsius,

Acta Petri, Acta Pauli, Acta Petri et Pauli, . . . (Lipsiae, 1891), pp. 129–31) の “Hinc populis seditiosam murmurationem agentibus Simon excitatus est in zelum, et coepit de Petro multa mala dicere, dicens eum magum esse et seductorem”（そこで民衆が反抗的な不平を漏らしたので、シモンは憤り、ペテロについて多くの中傷を言い始め、彼が魔術師であり、詐欺師であると言った）における excitare に由来する。(23) は *DOE*, s.v. *aweccan* 3.b に、(7)(16) と並んで、ラテン語原文と共に挙げられている例である。

31）LXX の語句の検索には E. Hatch and H. A. Redpath, *A Concordance to the Septuagint*, 2nd ed. (Grand Rapids, 1998) を使用した。

32）*Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament* (begr. v. G. Kittel, hrsg. v. G. Friedrich, 11 Bde (1933–79; Nachdr. Stuttgart, 1990), Bd. 6, s.vv. παραπικραίνω, παραπικρασμός) は、παραπικραίνειν は「כעס hi（怒らせる）を訳す場合、その意味は明らかに『怒らせる』である」(“Die Bdtg ist, soweit כעס hi wiedergegeben wird, eindeutig *erbittern, erzürnen*”）と記し（p. 125, 25–26)、この意味においてこの語は、「大抵 כעס hi の訳語となる παροργίζω と同義である」(“synon zu παροργίζω, dem כעס hi meist entspricht”）と指摘する（Anm. 1)。このことは、それと関連して同辞典が引用する、παραπικραίνειν と παροργίζειν が対になって用いられている以下の例からも明らかである——Ph. 1.682 (P. Wendland, *Philonis Alexandrini Opera Quae Supersunt*, vol. 3 (Berolini, 1898; Nachdr. 1962), p. 287): εἰ μὴ νομίζεις, ὅτι οἱ μὲν ὑπαιτίως ζῶντες παραπικραίνειν καὶ παροργίζειν ἐνδίκως λέγοιτ᾽ ἂν θεόν, οἱ δ᾽ ἐπαινετῶς οὐχὶ εὐφραίνειν（非難されるべき生き方をしている者たちは、神を怒らせ、憤らせるが、ほめられるべき生き方をしている者たちは、神を決して喜ばせない、と言うのは正しい——こうあなたが考えない限りは)。

33）R. Demeulenaere, “Commentarii super Cantica Ecclesiasitica,” *Verecundi Iuncensis Opera*, CCSL 93 (Turnholti, 1976), pp. 33–34.

34）(24)〜(37) の ἐκπικραίνειν, παραπικραίνειν ないし παροργίζειν は、すべてヘブライ語原典の כעס の Hiphil に由来している。BDB, s.v. כעס Hiph. 2 の「怒らせる（特に他の神々の崇拝により主を怒らせることについて)」(“*vex, provoke to anger*, esp. of provoking Yahweh by worship of other gods”）には、手段（instr.）を表す ב を伴う例が列挙されているが、これら同辞典が示す表現のうち、בתועבת（忌まわしいことにより）は (24) に、בהבליהם（彼らの偶像により）は (31)(33)(34) に、בחטאתם（彼らの罪より）は (32) に、במעשׂ(י) ידי(יו)（(彼の）手の業により）は (25)(26)(29)(30) に、בכל מעשׂ(ה) ידיהם（彼らの手のすべての業により）は (27)(28) に、בבמות（高い所により）は (36) に、בפסיליהם（彼らの彫像により）は (35) に、それぞれ見出されるギリシャ語表現の、元のヘブライ語表現である。

35）βουνός（丘）が異教崇拝の場であるのは、例えば *Ez*. 20.28: καὶ εἶδον πᾶν βουνὸν ὑψηλὸν καὶ πᾶν ξύλον κατάσκιον καὶ ἔθυσαν ἐκεῖ τοῖς θεοῖς αὐτῶν καὶ ἔταξαν ἐκεῖ ὀσμὴν εὐωδίας . . .（彼らはすべての高い丘やすべての陰のある木を見て、そこで彼らの神々に犠牲を捧げ、そこに芳香を据え、……）から明らかである。

36）U. Robert, *Heptateuchi Partis Posterioris Versio Latina Antiquissima e Codice Lugdunensi* (Lyon, 1900), p. 43. (38) および後出の (42) は、*TLL*, s.v. *concito* IIA1e において、「或事へ」（“in aliquid”）を伴う例として挙げられている（p. 65, 73ff.）。

37）Diercks, p. 207.

38）F. F. Fleckus, *Anecdota Maximam Partem Sacra in Itineribus Italicis et Gallicis Collecta* (Lipsiae, 1837), p. 340.

39）M. Winterbottom, *Gildas: The Ruin of Britain and Other Works* (London, 1978), p. 106.

40）J.-P. Migne, *Liturgia Mozarabica . . . Breviarium Gothicum*, PL 86 (1862), col. 53D.

41）Demeulenaere, p. 34. (44) は、IV で引用した、申命記32:16の古ラテン語訳に付された解釈（注33参照）に、すぐ続く部分である。ここでは、原文の「彼ら」を「我ら」にするなど言い換えがなされている。

42）M. Simonetti, “Ad Demetrianum,” *Sancti Cypriani Episcopi Opera*, CCSL 3A (Turnholti, 1976), p. 38.

43）J. Jackson, *Tacitus: The Annals, Books XIII–XVI*, LCL 322 (1937), p. 184. (46) および後出の (48) は *OLD*, s.v. *prouoco* 4の「（行動に）駆り立てる、奮起させる」（“To provoke, rouse (to an action)”）に挙げられている例である。これらはまた Georges, s.v. *provoco* II.A の「勧める、促す、要請する、活気付ける、（悪い意味で＝）挑発する」（“aufrufen, auffordern, ersuchen, anregen, im üblen Sinne ＝ reizen”）においても、1.a の一般的に（übh.）、また本来的に（eig.）用いられた provocare の例として挙げられている。ここで (46) は「悪い意味で」用いられた例として引かれていると考えられる。

44）H. J. Edwards, *Caesar: The Gallic War*, LCL 72 (1917), p. 196. (47) は *OLD*, s.v. *incito* 8a の「怒らせる、挑発する」（“To stir to anger, provoke”）に挙げられている例である。

45）J. C. Rolfe, *Suetonius*, vol. 1, rev., LCL 31 (1998), p. 460.

46）C. H. Moore, *Tacitus: The Histories, Books I–III*, LCL 111 (1925), p. 292. (49) は *OLD*, s.v. *incito* 6の「（人・心など）の熱情や熱意を呼び覚ます、励ます、奮起させる」（“To arouse the passions or enthusiasm of, encourage, stir up, rouse (a person, his mind, etc.)”）に挙げられている例である。

On Old English *aweccan* and Latin *concitare*

Satoru ISHIHARA

The Latin *concitare* “to rouse” in *Exacerbauerunt me in alienis, in abominationibus suis concitauerunt me* (VET. LAT. deut. 32, 16 (Lucif. non parc. 23)) “they exasperated me with others [other gods], with their abominations they stirred me up” is rendered in the Old English interlinear gloss by the *aweccan* “to rouse”: *Hy gremedon on fremedum on ascynungum heora hy awehtun* (PsCaD 7(6).16); the *concitare* and the *aweccan* parallel the Latin *exacerbare* and the Old English *fremman*, both of which mean “to make angry,” respectively.

The *concitare* and the *exacerbare* are derived respectively from the παροξύνειν and the ἐκπικραίνειν (or παραπικραίνειν) in παρώξυνάν με ἐπ᾽ ἀλλοτρίοις, ἐν βδελύγμασιν αὐτῶν ἐξεπίκρανάν με (LXX *De*. 32.16) “they exasperated me with others, with their abominations they enraged me,” where both the verbs mean “to make angry” and are in balance.

Since both *concitare* and *aweccan* can be used of stirring up a person in a good sense as well as in a bad sense, the *concitare* and the *aweccan* are out of balance with the *gremman* and the *exacerbare*. Except for the *concitare* in question, Latin verbs meaning “to rouse” are found twice translating Greek verbs followed by phrases expressing means of angering God by worshipping foreign gods: *in abominationibus nostris Dominum prouocamus* (VEREC. in cant. 2, 16) “with our abominations we stir up the Lord,” and *et ne incitetis me in operibus manuum uestrarum* (VET. LAT. Ier. 25, 6 (Cypr. Demetr. 6)) “and rouse me not with the works of your hands.” Both *provocare* and *incitare*, like *concitare*, can be used of rousing a person not only in a bad sense but also in a good sense. We can therefore conclude that the use of the *concitare* in Deut. 32:16 in the Old Latin version is similar to that of the *provocare* and the *incitare*, and that the imbalance caused by the *concitare* used regardless of the parallelism in the Greek is also found in the corresponding place in the Old English gloss.